【審査部会特別賞】 第11回 日本水大賞

日本一汚い川の汚名返上
近木川と人とのいい関係の再構築

橋本夏次

はじめに

貝塚市は、人口約9万人、市域面積約44平方km。東西約14.3km、南北約4kmの細長い地形。近木川は、全長約18km、流域面積約28平方kmで源流は、和泉葛城山（858m）にある。山頂には、国の天然記念物「ブナの原生林」があり、一帯は、金剛生駒紀泉国定公園で、河口には、大阪府下で唯一残った二色の浜海水浴場がある。その近木川の水質が、平成5・9年度と二度全国ワーストワンになり、それをきっかけに始まった活動で、近木川と人とのいい関係の再構築を目指すことになった。

61年から貝塚市職員として40年6ヶ月在職（内16年間万年課長）

公園緑地課長（88～95）

1988年～6年半　「花いっぱい運動」を職とボランティアでサポート。市民・学校との信頼関係

1990年～　生活重視の博物館「自然遊学館」の建設・運営に関る昆虫採集のボランティア（5年間）

1995年　近木川市民フォーラムを始める

交通公害課長（95～00年）

1996年　近木っ子会議事務局担当　助成金でフォーラムの継続
子どもの水辺登録　省庁連携事業環境庁から委託事業　近木川ルネサンスを作成。
出前教室は、子どもの目線で対応キャッチボール

都市計画課長（00年）

2000年 7月　第3回「川の日」ワークショップ
日本一のアホの行政マンでグランプリ
環境省　環境カウンセラー（市民活動）

課税課長（01年）

2002年 3月　退職
7月　貝塚市立自然遊学館非常勤嘱託
01年12月　近木川流域自然大学研究会代表

人と自然とのいい関係

「木は、自然の恵みじゃ。感謝して使わしてもらんと罰が当たる。百年経った木を使うときは、百年以上住める家を建てないと大工の恥じゃ。」和泉葛城山の麓、蕎原地区に住む元大工の棟梁（当時82歳）の話である。建築主に対して、棟梁が始めにすることは、「近所付き合いから、親戚付き合いを見る」ということであった。私も、中学生の頃「建て前」を手伝った経験がある。元棟梁は、手（手伝い人）を勘定しており、田舎での建て前は、棟梁一人で指揮をとれば可能である。大工の手伝い、壁下地を編む人、あら壁を塗る人、屋根ふき（プロ）の手伝い等々、その道のセミプロ（リーダー）が地域にいるからである。チームワークがとれて「阿吽の呼吸」で仕事がはかどっていく。建て前が終わった後、祝杯をあげながら必ず振り返りがあった。批判するのでなく「こうしたらいいね」ということであり、これが次につながる。日本における協働の原点はここにある。写真①

子どもたちはこれを実感した。07年、滋賀県高島市針江の「かばた」をたずね、地域の人から話を聞いた子どもの言葉に驚かされた。「日本人は、昔は自然を大切にしていた。でも今は、自然よりも自分の生活を大切にしている。だから自然がなくなっていく。自然は、あって当たり前ではない。」棟梁の話や子どもの言葉は、自然の恵みに感謝して、畏敬の念を持つことである。なぜ、これがなくなってしまったのか、改めて問われなければならない。私は77年から通算8年半、大阪府の事業

写真①　元棟梁自慢の家

「二色の浜環境整備事業」を担当し、市民参加やまちづくりについて大阪府の幹部職員から指導を受けた。これからは、市民活動を育てることが行政にとってもメリットがあると考えた。

花いっぱい運動

88年から、公園緑地課長として「花いっぱい運動」を育てた。運動は、貝塚高校園芸科の生徒が花苗を作り、市のメインストリートに定植、地域の人が管理する方法で定着した。また、花苗は、幼稚園・保育所、小・中学校に配布、町会、婦人会などの参加もあり、全市的な広がりを見せた。上司から街路のフラワーポットは、ゴミ箱になると反対されたが「私が集めます」と。週3回出勤前に実施した。しかし地域の人から「課長さん、私らでやります」との声で引き継いだ。90年の「花の万博」では、市の花「コスモスの花壇」を婦人会で3回出展、金・銀・銅賞を受賞。花苗づくりは、農家のビニールハウスを借りて、2ヶ月を要した。もちろん朝晩の水やりは、出勤前後で私が対応した。管理は、費用がないので、私が担当。朝5時におきて会場に出かけ、週2回水やりをした。ここでのこだわりは「行政はサポートするけど、コントロールしない」自ら汗をかくことで地域や学校などから信頼を得た。これが後の近木川の活動に役立った。

生活重視のまちの小さな博物館（自然遊学館）

花いっぱい運動の成功から、貝塚の豊かな自然を次世代へ継承する市民活動を育てたいとの思いで、まちの小さな博物館「自然遊学館」の建設を提案。テーマは、「自然とのふれあいの中で郷土愛を育てる」とした。このとき参考になった新聞記事がある。91年3月16日付朝日・諸岡博熊（UCCコーヒー博物館長　当時）―前略―「知識偏重の博物館でなく、生活を重視した博物館にするという基本的な柱を立ててはどうだろう。この柱からおのずといろいろな発想が生まれてくるはずである。市民不在であってはならない。」である。

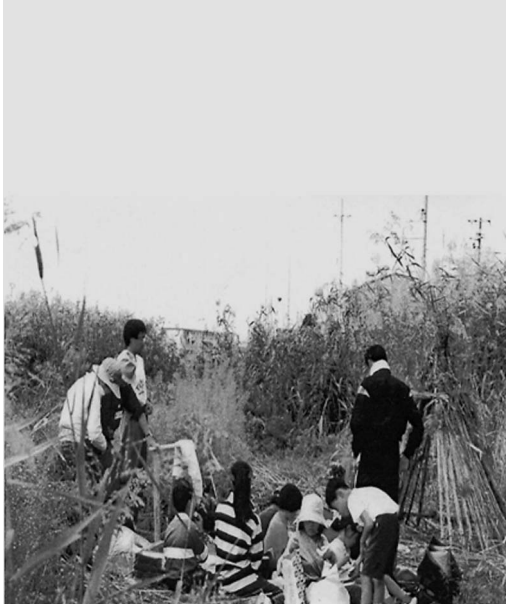
そして、職員も専門家でなく自然が大好きで市民活動を育てられる人を中心に構成を考えた。当時の市民活動は、「金がない、人がない　場がない」の（3ない）が問題になっていた。そこでこの（3ない）を行政が保障、代わりに「公平、公正、公開の原則」を、との考えで03年10月開館。所属は自然保護担当課とした。名前も子どもの遊び文化の復活を願って「自然遊学館」と名づけた。

開館に先立ち、困ったことがおきた。展示のテーマは「近木川」。これは私が広報にいるとき葛城小学校の子どもたちの「近木川」の取り組みが理科作品展で金賞をとったことに起因している。

しかし、展示のため市内の昆虫などを採集、標本づくりを業者委託すると4千2百万円必要であった。予算がないので、自分で採集することにした。知り合いの先生に海から山まで採集ポイントや方法を指導していただき、3月から11月にかけて休祝日の殆どを費やし、休暇もとった。年間活動日数は100日を越えたことも。この経験であらためて貝塚の自然の多様性、豊かさを体験することができた。採集は336種,1443固体、蝶67種、トンボ45種で、ヤクシマルリシジミ、ヨツボシトンボ、サツマシジミなどはネイチャースタディ（大阪市立自然時博物館）で紹介していただいた。採集時、山手地域の人からは、「大変やな、ご苦労さん」と声がかかり、時にはイチゴや大根もいただいた。地道に汗をかいていれば市民はどこかで見てくれていると活動の励みにもなった。たくさんの人に助けてもらって立派な標本ができた。費用は5百万円であった。

全国一汚い ―近木川― 二度のワーストワン93

94年12月、「近木川の水質最悪」との新聞報道があった。翌年2月、第一回近木川市民フォーラムで、地元出身の嘉田良平氏（当時京大教授・現横浜国大教授）からワーストワンは貝塚の恥じ、市長自ら胴長をはいて隊長として近木っ子探検隊を結成し、活動してはとの提案があった。参加していた市長は「やります」とこたえ、4月「近木っ子探検隊」を結成、活動が始まった。写真②



写真②　近木っ子探検隊の活動　清掃の後遊び

市長も隊長として参加、市議会議員や市民、たくさんの子どもたちが参加した。清掃の後、アシを使ってすだれや家づくりで楽しんだ。さすが、子どもは遊びの天才と感心したのは、アシ原で迷路遊びをしていたことである。これ等の行事を通じて、近木川の水をきれいにとの思いが共有できた。6年12月から、大阪府の指導で生活排水実践活動を始め、6町会（6年間）で実施した。BODの削減効果4割以上が2町会あり、いづれも古くからの町会で、近木川への思いが活動を左右することが分かった。BODは、9年度の21g/lから19年度6.7g/lになった。表1写真③ ④

削減効果BOD

年度	実施日	町会名	世帯数	削減効果				
				BOD	COD	SS	油分	MBAS
6	平成6年12月1日～10日	和泉台	603	12.0%	—	—	14.0%	10.0%
7	平成8年 2月1日～10日	畠中	335	40.0%	25.0%	23.0%	20.0%	—
8	平成8年12月2日～11日	府営貝塚森府住自治	477	18.5%	24.0%	15.0%	39.0%	—
9	平成10年3月1日～10日	三ツ松西ノ町	81	26.3%	28.3%	44.2%	8.4%	—
10	平成12年3月1日～10日	旭ヶ丘	180	18.8%	—	—	—	—
	平成12年3月6日～15日	馬場	250	41.9%	—	—	70.0%	—

表1　生活排水実践活動

写真③　95年　近木川河口

写真④　00年　近木川河口　同じ場所

近木川での環境学習

近木っ子探検隊の活動も、担当者が変わり初期の活動ができなくなった。

私は、95年4月、環境担当の交通公害課長に移動。96年、小学校から環境の出前教室の依頼があり、係員4名で4クラス担当。当初戸惑っていた係員がニコニコして帰ってきた。質問攻めで休憩もとれなかったけど楽しかったと話した。出前教室で、行政と学校のいい関係ができた。

さらに、学校と自然遊学館をつなぐため、思いつ

いたのは自然大好きな小・中学校の先生方と組織を作ることで、6ヶ月間の実情把握のうえ8年12月近木っ子会議を結成した。その世話を自然遊学館でと持ちかけたが断られ、交通公害課長が引き受けた。会議を自然遊学館で開催することで学校とをつないだ。

近木川市民フォーラム

95年2月のフォーラムの成功から、何とか継続したいとのおもいで営業を始めた。大阪府が空間管理基本計画を策定していたので、フォーラムの必要性を提案、95年度は大阪府と共催でした。96・97年度は環境庁からの委託事業を大阪府で受けていただき、貝塚市史をはじめ、緑マス、総合計画などを参考に「近木川ルネサンス」としてまとめ、フォーラムも開催した。フォーラムは、98年度から近木っ子会議が、河川環境管理財団、省庁連携事業などの助成で継続することが出来た。フォーラムの目的は、汗をかいた人に発表などで光を当て、さらにパネラー（異分野）から甘辛のコメントをいただき、会場との議論で次の目標をつくった。

日本一のアホの行政マンでグランプリ

「川の日ワークショップ」が、98年度から始まり参加入賞した。99年度は予選通過のみ、00年度は、予選落ち、敗者復活で浮上し、最終戦で私は、沈没覚悟で自分をさらけ出した。結果「日本一のアホの行政マン」でグランプリをいただいた。ここへの参加は、いろんなアドバイスや応援があり、力をもらって活動につなぐことが出来た。

姉妹都市交流

貝塚市の姉妹都市、カルバーシティ市（米・ロサンジェルス近郊）との交流は00年から7回訪問し、たくさんの情報を取得した。03年3月の「世界子ども水フォーラム」では，カルバーシティ市から2名の高校生を招聘していただいた。その後、グローバル、ローカルな活動するNPO2団体を招き、フォーラムを貝塚市で開催することが出来た。

近木川流域自然大学　海・山・川の分校

99年2月のフォーラムで、子どもたちが発表。

「前に、モクズガニを見つけたところに行くことになって、行ったら、2mぐらいの川になっていた。大きな石を探して橋を作り、渡ろうとしたら流された。最後は、エイヤーと裸足で入った。」市教委の先生からこの発表は中身が濃いといわれ、繰り返し読むうち、はっと気がついた。彼らは、川の流れが変わること、石が流される水の力などを知ったからである。私は、それまで子どもたちが楽しむようにと3隻の船を作り利用してもらった。しかし、これからは子どもの感性に任せよう、子どもから学ぶべきだと決意した。写真⑤

写真⑤　手作り（橋本）の船で

子どもたちは、「調べ学習をしている気がしませんでした。とっても楽しかったです。遊べる近木川にしてください。」参加者への要望があった。これに大人・行政は応えなければ、との思いでいると、ちょうどNHK教育テレビで「子どもの参画」の話があった。出演していた、木下　勇千葉大助教授（当時）にぜひお会いしたいことを、知人の先生にお願いすると、偶然「週末にロジャー・ハート先生が来日するよ」といわれ東京に飛んでいった。懇親会で川の分校づくりを「子どもの参画」で進めたいとロジャー先生にお話したところ大変評価してくださった。これは、ぜひ施策計画に位置づけをと提案。結果、採択されたが実施には時間がかかった。

そして、自然遊学館の非常勤嘱託になったとき再度提案、採択された。近木川流域自然大学　海の分校（貝塚市立自然遊学館）、山の分校（ほの字の里）は既設の施設を利用、川の分校を近木川中流

清児橋付近に子どもの参画で進めることが承認された。

さらに、子どもたちの活動を評価していただいた方から「近木川汽水ワンド」の提案があり市民活動で取り組むことになり、町会連合会長に相談して「汽水ワンドをつくる会」の会長を引き受けていただいた。ところが、担当者が専門的な取り組みとしたため役員から苦情が相次いだ。その結果、提案書採択の会議で、地元の2町会から。「なんぼええことか知らんが、わしらに何の関係があるねん」と怒らしてしまった。地元町会の理解が一番大事なことが理解できず、市民不在の対応となった。

そして03年、大阪府が事業化した。地元町会の同意を取り付けるため、事業担当者が日参し、説明会も何度も行われた。私も助成事業で聞き取り調査など地元に集中して実施した。正月号の町会紙に関係記事を記載、1千戸に配布していただいた。これ等の活動で、同意を取り付けた。さらに、子どもたちの力で始まったこの事業、何とか子ども中心ということで「子どものワークショップ」を開催することになった。

こなかった（館長の椅子）

00年、都市計画課長となった。定年まで後3年、ユニチカ跡地の問題、川の分校、汽水ワンドなどを含め、地域特性を活かした地域住民主導のまちづくりで仕上げをと考えていたが、上司の理解を得られず1年でお払い箱。13年4月、環境とはとまったく関係のない課税課長となった。そして決心した。自然遊学館では専門家が中心で、生活重視の博物館が怪しくなった。館長を世話した人から1年契約と聞き、後釜希望で退職願を市長に提出、14年3月末で退職した。7月から自然遊学館非常勤嘱託として席を置き、フォーラムや出前教室、市民活動を担当。館長は2年延長となり、椅子はこなかった。その後も館長の椅子はなかった。うわさで「あなたを、絶対館長にしないといっている」と人づてに聞いた。活動は、01年12月発足した近木川流域自然大学研究会で助成金を獲得、ロジャー・ハート、ロビン・ムーア先生の講演会、近木川市民フォーラム、05年から「子どもと大人の井戸端会議」などを開催した。自然遊学館では、対外的な対応は殆どすることがなかった。環境学習の打ち合わせにも入れなかった。市民として参加した「汽水ワンドをつくる会」は、専門家中心で開催、呼びかけもなかった。市民や学校関係者との信頼関係で、出前教室のお呼びがかかり携帯やメールで打ち合わせをし、辛うじて活動を続けることができた。

あるとき館長が、来館した中学生に、専門で担当が違い勤務も変則であるので、事前連絡をしてくるようにと、話も聞かずに返した。私は、彼らを呼び止め、話を聞き、すべて情報提供ができるのでとクラブや、学年全体の出前教室などで対応し

「自分たちで川を汚しているのに自分たちで掃除するのなんかへん？」感想を看板に。高校生（子どもと名キャッチボール）

水きり合戦近木川河口　二色の浜

環境学習で　近木川中流

た。彼らから、「近木川の四季の写真などは、どこの県や市にも負けていない」「人生を環境のために尽くすというのはすごい見本」などなど生徒全員から、このような感想をいただいた。

つなぎ役、コーディネーターとして黒子で

88年から「花いっぱいを」育て、90年から自然遊学館にかかわり、近木川の活動をした。常に汗をかいている人が評価されることに気配りをし、特に子どもに対しては、相手の目線で一歩下がって対応した。出前教室では、今・昔、上・下流、きれい・汚いところなど、比較できる情報を提供し、相手の目線でキャッチボールをしている。

しかし、館長から「あなたは館長になれないからあなたの活動は認められていません」といわれた。

このような状況の中、私が活動できたのは、信頼してくれた学校関係者、地域の方々のおかげである。「結果が出て、感謝するのは後々の世代です。人生を環境のために、未来のためにというのは、とても、すごい見本です。」中学3年生の子からいただいた言葉です。信頼してくれた「近木川の川ガキ」たちありがとう。命の続く限り、活動します。

コーディネーター、つなぎ役としては

① 地域が大好きで地域をよく知っている。

② 人脈がある。

掃除もするよ「件の湯」

③ 情報を持っている。

④ 相手の目線で一歩さがって対応。相手が必要としている選択肢を提供することができる。

⑤ 大所高所から見ることができる

アホの行政マンとは

・要領が悪く、自己アピールが下手。

・汗をかくことを惜しまない。

・始めたら最後まで全力投球。

・誰とでも対等。

・主義主張にとらわれず、チャンスがあればその場でものにする。

・短所を知り、カバーできる手段を持つ。

・逆境に強い。

・恥をかくことを恐れない。

17年間の活動を振り返り、近木川は、素晴らしい地域特性を持ち、地域の生活文化を育てた。そして、素晴らしい川ガキを育てている。その川ガキが、忘れられた地域の伝承を掘り起こし、近木川と人とのいい関係の再構築へとつないでいる。

私は、今年で67歳になる。70歳で一区切りをと考えていたが、今回の受賞で考えが変わり、大賞を目指すこととした。今一番の願いは、日韓の川の活動家と協力して　アジアで水に苦労している子どもたち（川ガキ）を招き「アジアの川ガキ」ワークショップを開催し、グランプリになった子の「水辺」を政府の肝いりで「アジア遺産登録」をして、安全で遊べる水辺を保障する取り組みをしたいと考えている。

橋本夏次